

スポーツ少年の膝蓋骨近位端に骨端症性変化をきたした2例

公益財団法人 スポーツ医・科学研究所
鬼頭 満 横江清司 亀山 泰

【目的】

成長期のサッカー選手に生じた非常にまれな膝蓋骨近位の骨端症を2症例経験したので報告する。

【症例 1】

11歳，男性，サッカー選手。左足でシュートした時に左膝痛が出現，近医を受診したが確定診断されず，当所へ紹介初診。単純X線上で膝蓋骨近位に骨透亮像・骨分節化・不整像を認めた。骨腫瘍も疑ったが，MRI上で腫瘍像は認めず，膝蓋骨近位の骨端症と診断した。保存治療を行い，4カ月で，症状・身体所見は改善した。12カ月の単純X線上では膝蓋骨近位端に小さい骨分節化を残すのみで，不整像は完全に修復されていた。現在，サッカーへ完全復帰できている。

【症例 2】

9歳，男性，サッカー選手。サッカー中に右膝痛が出現。近医を受診したが確定診断はされず，患者の希望で当所へ初診した。単純X線上で膝蓋骨近位に骨透亮像・骨分節化・不整像が認められた。血液検査で異常なし，MRI上で腫瘍像は認めず，膝蓋骨近位の骨端症と診断した。保存治療を行い，症状は1ヶ月程で改善し，サッカーを再開していた。5ヶ月後，ランニング中に障害物で打撲して痛みが再発した。単純X線上は骨化傾向を認めた。再度のスポーツ中止指示・トレーニングによる保存治療を指示した。1ヶ月ほどで症状改善し，2ヶ月後にはサッカーへ復帰した。受傷後1年1カ月の単純X線上では，膝蓋骨近位部に透亮像・分節像は残存しているが骨化は完成しつつあり，サッカーへ完全復帰できている。

【考察】

われわれの調べた限りでは，膝蓋骨近位部に生じる骨端症についての報告は5文献のみと少なく，診断に苦慮すると考える。鑑別疾患として腫瘍性疾患，感染性疾患，骨壊死，外傷などを考える必要があるため診断には注意が必要である。本疾患の存在認識と保存治療で全例が治癒するという認識が必要と考える。